（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　坂元（さかもと）　昌樹（まさき）

本論文は保田與重郎の１９３０年代から４０年代にかけての古典文学論を軸に、そこに内包されていた可能性と限界を、同時代の思潮との関係を中心に考察したものである。

第一部ではまず、保田独自の〈日本の血統〉の観念が生成されていく様態が分析されている。ウォーラーステインの「反システム運動」の概念を援用しつつ、保田にあってマルクス主義と民族主義とが、共に被抑圧者の解放という観点から連続的に捉えられていった経緯が明らかにされている。また保田が、沖縄の現状を直視できなかった当時の民芸学の限界を見据えながら自らの〈民族〉概念を生成していった経緯、また彼の〈郷土〉概念が水平社の運動を視野に入れた、異種混交的な性格を持っていた事実などが明らかにされている。

第二部では、保田の方法意識が具体的な古典文学論を通して解明されている。すなわち、後鳥羽院、西行、芭蕉に至る〈隠遁詩人〉の系譜が、当時の進歩史観や科学主義へのアンチテーゼとして編み出されていった過程、和泉式部が、近代的理知を否定する手だてとして再評価されていく道筋、折口信夫の影響のもとに、被抑圧者の「声なき声」の主観的代行として万葉の精神が捉え直されていく経緯などが明らかにされている。特に近代国家の成立に伴って形成された「国民」像が１９３０年代、４０年代に変質し、それまでの〈民族〉概念では掬い切れない多様な側面に立ち会う中で、彼独自の〈民族〉概念があらたに創出されていったという指摘は、保田與重郎の再評価につながるものとして傾聴に値しよう。

第三部では、戦後の保田の「絶対平和論」に、当時、情勢論に流されがちであった論壇への批評が内包されていた事実が明らかにされ、さらに、文学的自己形成期に芥川龍之介から受けた影響、太宰治の初期作品との共通点などが指摘されている。

保田の古典作品に関する具体的な理解に関しては、今後、さらにより詳細な分析調査が望まれるが、最終的にはさまざまな概念が暴力的に〈日本の血統〉に回収されていく陥穽を冷静に見極めつつ、なおかつ当初その〈民族〉観に内在していた可能性を丹念に掘り起こしていく分析の手続きは高い評価に価する。

以上の点から、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。